Title	ヴェニス石(下)ラスキン伝一八四九-一八五三年の一節
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.5 (1924. 5) ,p.694(74)- 723(103)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240501-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ヴェニス石』(下)

ラスキン傳一八四九—一八五三年の一節

奥井復太郎

七

一八五一年三月三日出版せられたる『ヴェニス石』第一巻は賣行餘り良好で無かつた。其理由の一つはニギニの低廉ならざる定價が同書の普及を災したにあるのであらう。然かし他の原因は寧ろ第一巻其もの性質に因る、第一巻は名付けて「基石」^{フアウンデーション}と稱され序文に示さる、如くヴェニス建築を其根底に於いて解剖せる精密なる穿鑿であり従つて論ずる所筆致自から聊か地味ならざるを得ない。故に同巻に對する一批評に次の言あるは其間の消息を語るものどすべきである。

『ラスキン氏の新書を繕ける者がその美しき題名によつて、かの海を環らせる都の構成に關する記敘註解を、此のオクスフォード卒業生の莊麗雄渾なる文辭の内に見出すべく、又美術家たり詩人たる人によつて描かれたる詩と美術との都會を見出すべしと豫期せば、恐らく彼等は失望の感あるべし。然かれ共吾人は彼等がかくどて慌しく其を閉づる事なきを戒むべし、蓋し吾人は諸所に著者の見解と相違するところありと雖も、彼等がその會得に費せる時間に應じて喜びと教へどの形式に於いて幾多の報酬あるを約すべし』。(一八五一年三月二十二日、ゼ・ビルデア誌)

しかる所以はイー・ティ・クックの言葉を借りれば『基石をよく且つ正しく据置すべき事は如何なる大業にも缺く可からざる所である。併し其基石は、最も立派なる杭材のそれにして上

部構層と離れては幾許かアットラクディヴネスを失ふものである。然かも基石は裝飾を施す可き場所ではない。かくて此書の第一巻はラスキンの讀者が彼より期待せんとせる絢爛たる字句を有する事少いのである』。著者の同情者と云へども其主旋の比較的乾燥無味なるに失望せるもの、如く彼の父ジェームズさへ續巻が一般の趣味に對して固苦しきに過ぎざるやを懸念した。是等に對するラスキン自身の解釋は一八五二年ヴェニス滞在中の書翰に現はれる。彼は筆力に衰退あるに非ざるを示し、續巻を完成の曉に待つ可きを希望し、第一巻に現はれたる文章の調子に就いては次の如く述べてゐる。

『……是等の諸點は「七燈」に於ける何物に比較しても、よしかくの如き高向なる問題を取扱はずとするも、其比較に耐へるものであると思ひます。恐らく近頃健康の懸念や或ひは種々様々の苦惱心配等によつて聊か氣魂が缺けてゐるのかも知れませんが、爲めに私の研究や穿鑿を直接に亂す事がなくと

も、丁度是等の事情が實際眼を弱め聲を低める様に、氣の着かぬ内に調子を殺し書く文章の跳躍を鈍くしたのでせう。併し私は歸宅後加へうる丈けの修正を施し、全巻を通じて父上が御覽下さればヴェニスに於ける私の十二ヶ月間が空しく費されなかつたと御思召すと信じております。私は此書が深い印象を生み出しうる自信を持つてゐると申したいのですが、今や私の自信は餘り屢々裏切られてゐるのです。「七燈」も出版後一年で全部賣切れると思つてゐましたし、私が山兎の様にさう多勢の友達を持つてゐると思はなくとも出来る丈けの勞苦を投じた五枚のドロウイングに「ギニ」を拂ふ位のはロンドンに十五人以上は居るだらうと考へてゐました。ですから私は最早自信を置きません、併しかく多大の勞力を拂はしめたものを能ふ限りよく完成するにつとめ、其の結果の方は成るべく自分を煩はさない事とします」(一月十八日手紙)

此最後の言葉は著述に於けるラスキンの態度であり精神である。第一巻の賣行の遅かつた事は明かに關係者の苦慮せる所であらう。「ヴェニス」の石は著者に一萬二千磅の費用を要したと稱せらる。クックは之れを以つて第一巻に續いて出た The Examples of Venetian Architecture の諸費用並びに恐らくはラスキンのヴェニス滞

在費をも含むものであらうとしてゐる。兎に角爲めに要せし費用の少なからざりしは事實である。故に五二年一月十六日の書面にはラスキンが父に及ぼす失費の大にして其償ふ所なきの遺憾を表してゐる。五一年十二月には出版者スミスの手紙に言及して「ヴェニスの石」第一巻及び「ラファエルの前派論」の賣行きに關して不幸なる報告を受けし旨を記し次の様に云つた。

『……私は常に「著述に當つてそれと共にその重大勢力を減殺する様なものを書く癖」があるのです、でその癖は出すまいとしてゐます。事實出来るだけこの第二巻は一般向きのものでなければなりません、教養の挿圖の美しいのを加へて、讀手がなければ立派な本を書いても無駄です』。

併し二月十八日の書翰は前掲一月十八日のそれと同じく著作に對するラスキンの態度を明白に示すものにして、

『ヴェニス。一八五二年二月十八日——父上が私の好古癖に少しも興味を持たれない事を悲しく思ひますが、同書完結の曉にはずつとお好みになる事を信じております、兎に角完結も

易明瞭を目的として多大の思慮を拂つた。此意味に於いて「ヴェニスの石」はラスキン文體の中期を形式する最初のものである。「近世畫家論」第二卷の華麗絢爛に比して此書は Blackwood Magazine をして『極めて楽しく、且氣品と明瞭とを以つて書かれ、各頁には爽快なる生氣を有する』と稱せしめた。然かも平易明瞭を企圖して鈍調に墮せざるはラスキンの力である。『主題の大部分は技術的であるにも拘らず同卷は往々想像力的雄辯を含める文句の存在によるのみならず、其の手法の獨創文體の明快とによつて無飾より救はれ』その文體は『到る處に制限され簡單ではあるが快活と暗示的興味とを以つて旺盛せるのである』(クック記)ラスキン自身も此點を認むるが故に父ジェームズへの書翰には

『朝食の時自分の「ヴェニスの石」を開いてみました、其は私を誘ひ進めて祈禱時に至るまで措くあたはざらしめまし

間近かですから全二ヶ年間の勞作を放棄するは愚な事です。私は自分の感じ、興味を有するもの以外には書くを得ません。世間の爲めに書くなんて出来ない事です、世間がどう考へ様々私が重要だと思つた確信の下以外では書いた事はありません。大した事のない私の力も巧く書いて世間の人を捉へ様々企てる瞬間には凡べて失はれてしまひます。私が世間にロマンスを約さないで石を約したのは御承知の事でせう。パンの約束すらも致しません。ヴェニスに於いて私はロマンズなぞとても感じません。其はエセキエルが第二十一章第三十一節に書いてゐる様な人達によつて足下に蹂躪された廢滅の累堆です、私が教へ様々する大事は即ちこの事なのです、事物についてメアナア張りの叙述をするには十日の研究又は滞在をも必要としますまい。私の爲した事は最後に於いて有意義であるを信じてゐます。Ferguson 其他が詳細を書き得ると仰せられるかも知れません。御尤もです、併し彼等は詳細を纏める事が出来ません、殊に彼等は此處に来てそれを爲ません Ferguson & Cooke 共にヴェニスに居て従事するならば私は用はありますまい、併し一人は印度で他は希臘で仕事をしておゐます、私以外に茲で働かうとする者はありません』。

材題の地味に相對して考へらるゝは更に前述せる文辭の素材であつた。彼は此書に於いて平

た。……最も興味ある本で最も鈍調ではない、新しい心持で此書に接する時其は私に感されたる力の印象を與へます、確かに此著は終に賣れ来れると思ひます。(五二年二月二十九日)

「ヴェニスの石」第一卷の世評に就いて見れば依然非難と褒辭との兩者がある。就中著者をして最も不快ならしめしものにエデンバラ・レヴェーの評論がある。其はラスキンの所説を評して多大の修正を要し、且然らざれば續卷の出版に耐へざる可し爲す、ラスキン之に對して曰く『私は今日エデンバラ・レヴェーと一所に御手紙を頂きました。エデンバラ・レヴェーは恐ろしく愚鈍で、今迄の評論中エコーニストに次いで最も儲越なるものであると勘考いたしました。私に對する彼等の見解を私が鉛肝するならば次卷は著しく改變されるであらうが若し然らざれば出版に適せざるものであらうと云ふ意味の事を——冷淡に述べてゐるのですから御想像下さい。其筆者が私の心に這つて石の間に生活する事十年に及んだ一事が私の心に授けた理解力の性質を悟り得たらどんなものでせう、私は彼等が無思慮なりとせる小句短文が此新卷に於いて如何に再三再四依據せらるゝかを見、如何にあらゆる種類の豫期せざる真理の基礎を爲すやを見出

す時——彼等が如何に私が是等短文小句を書き下す際、悉く其裏を深く眺めてゐたかを感じ始むるに至つては遂に少なからず吃驚するものと思ひます。(五一年十月十六日)

此評者がラスキンの友人コヴァントリー・パトモアであつた事は興味ある事とされてゐる。後者は自から編輯者がラスキンにとつて不信なる意味に於いて改竄を加へたる旨を父ジェームズに報じた。初めに掲げたるラスキンの書翰(一八五二年初)は之れによつて見るに如何にラスキンが一般評論雑誌の批評に不快を感じしやを示すものと考へらる。五二年二月二十七日の書翰にはなほ強く感情が現はれる。

『もう批評をお送り下さいませぬ。私は批評に對して鋭感たるものではありませぬでした。批評に對して鋭感たれど非難せらるゝときは非常に怒つてしまふのです。併し私は今は鋭感せず、一つは神經質から二は私の著作がより大なる努力を投ぜしめたからです。私は坐して二時間ばかりで澤山に無意味をつらねた詩を書く事も出来ませう、若し批評家がそれをノンセンスだと云つたら私は彼の意見の正當なるを認めませうし、又其批評を氣にかけませぬ。併し一冊について二年

間も努力し、其中の各一言一句に充分なる考感を拂つた時に唯々哀れな耳長がの獸には薊には兩面がある云ふ事がわかないと云ふ愚鈍の故にガアア誌の如く頭の朦朧たるやぐざ者が私の所へやつて来て「お前の所論の一半は殘の一半に正反對の議論だ」なんて云ふのはたゞ本當に私を困らせ、激怒せしめる事甚しく、同時に辭々たらしめるんです。ミス・エツゲラアスは「無條件の褒辭を澤山捧げる」より外に著者を満足させるものはないと云ひましたが、私は少なからずこの様な氣持になつてゐると思へます、さにかくもう之上評論を送つて下さいますな、仕事してゐる私の氣持を非常に損ふ事となりませぬ。

即ち是等の書面によつて見れば如何に一部の評判が悪かつたかを想像する事が出来る。勿論かゝるラスキンの不快は著者に於ける所謂「無條件褒辭」を強請せんとする自負が原因を爲すと見るも一部至當であるかも知れない。併し前記ガアア誌の評論中にある「一點即前述の「圖譜」のプレイトの批評に於いて「併し力強く且つ巧みに鑄版せられたる、蔭影部も無趣味にして貧弱なる建築を吾人に納得せしむるに至る

ものでない」とする一句はヴェニス建築に關する當時の態度であり又ラスキンの改めんと焦慮せる最大の目的を形成するが故に、かゝる批評的態度は著者を憤らしむる所大であつたであらう。反羅馬加特力的偏執はゴシック復興運動に興味を有せる高教會派に對して和解的態度を示さしめざるが故に豫期しう可き最大の援助を不可能ならしめたと云はれてゐる。併し建築職業者に對する關係も等しく悪かつた *Something on Ruskinism; with a "Vestibule" in Rhyme. By an Architect—London: Robert Hastings, 13 Carey Street, Lincoln's Inn, 1851, large 12mo* の小著は明かに時代の傳統的精神に於いてラスキンを嘲弄するものであつた。殊にセント・マアクの建築に對するラスキンの稱讚はあらゆる方面から異端邪說偏見と見られ、ラスキンの舊敵である *Athenaeum* はラスキンの所論を以つて「著者の

精神状態に關して疑惑」を起さしむるものと極言した(一八五一年三月二十二日)

併かし第一卷の賣行不況をかゝる批評にのみ歸する事は出来ぬ、蓋し他の一般批評はラスキンにとつて有利なものであつたからである。多くは長文の引用を以つて其著を褒讚した。The *Ecclesiologist. The Church of England Quarterly* 等其れである、就中後者の評論中には事實ラスキンの影響を語る一節がある。

『文學、科學或は美術等いづれの社界に於いても彼の名は、單に彼に見解の相異を披瀝せられたる人々によつてのみならず、彼の著作によつて非難せられた人々によつても尊敬を以つて語られてゐるを聞く、筆者は今前に、かなり知名の美術家よりの手紙を有する、彼は稍あからさまに書いてゐる「彼は俺を吹き飛ばしてしまつた。が本當の事を云つてゐる、俺はそれによつて得る所がありさうだ。兎に角彼奴はエライ奴だ』』

之は又同時に文學者の方面に於ける態度でもあつた。シャーロット・ブロンティ、ミセス・ガス

ケル等は「近世畫家論」に於けるが如く又ラスキン新著の稱賛者であつた、併し最も有力なる褒辭はトマス・カアライルのそれであつた。ラスキンが第一卷に於いて「基石」を据へたる仕事の完成に努力せるはカアライルの鼓舞を感じたるによるものともされてゐる。

『前文略——筆者註参照』既に余は「石」に熱中してゐる、どこまでも熟讀する心組みで。建築學教理の最良たると共に一つの奇妙豫期せざる、而かも余の信する所によれば最も誠にして優れたる「石の叢書」である。之れによつて余が學ぶ所は多方面に於いて多かるべし。是等貴氏の批判的研究の精神並びに趣意は余に對しては現代の卓越せる前兆であり誠に満足すべきものである。貴氏の充分なる御成功と遙か彼岸への光榮ある到達を祈る。吾人の今將に入らんとする所は一つの全く新しき「ルネイサンス」なりと信ず、新しく、より廣き永遠の星の如くに再び高き成長に進むか或は然らざれば永遠に終窮の死滅ゲヘナの沼に沈淪するか。一つの恐るべき過程なれ共又必要にして避くべからざるものである。現在諸國の何れが其の渦中に捲込まれる可きか、いづれが蹂躪し去られ、その過程に於いて廢滅すべきやは極めて疑問ならんもその結果がいづれの方向なるやは毫も疑はぬ所である。神は偉大な

作を投じたのは事實である自敘傳には後年の述懐と共に次の如くある。

『ヴェニスに於いて「ヴェニス石」の爲めに最後の仕事。同書は其冬終ゆ。そのノート四折判六百頁は、丁寧、整然と書かれたるに今は不用、兎に角一種のドローイングも可なり多い。共に無用なり』

かくて第二卷は五二年末ラスキンの手を離れて五三年春勿々に出版せられた。同年のロンドン社交期には彼は再びグロツツナア・スタエアのチャールス・ストリートに家を求めて其處に移つた。第三卷は應て完成に近かんとしてゐたがラスキンは Arundel Society の爲めに「チェンビット」どパツアに於ける彼の作品」に關して註解を書いた此註解はエフ・ハリソンの賞讃する所である。(註)七月にはラスキン夫妻は蘇格蘭に赴き「ヴェニス石」第三卷の最後の校正は此地で爲

り、他の事物に於ける如くに「羊舎の構造」に於ける變化が極めて重大なる可きを要求するは確實なり。(後略)

註、此の書翰は三月九日附である、省略せる前文は「ヴェニス石」の献本に對して關係なきもの、如し、屢々全文に於いて引用せらるゝはラスキンとカアライルの交友を知る最初の材料なるによるもの、ならん、後略せる部分はカアライル夫妻の感冒について報せる部分なり

八

續卷の出版に先立つ事二年「ヴェニス石」第一卷出版の情況は以上の如くであつた。第一卷執筆後ラスキンは五一年より五二年をヴェニスに於いて著作の完成に費した。一八五二年夏ヴェニスより歸英するや彼はバアク・ストリートの家を捨てハアン・ヒル第三十號の新居に轉じた、此家はラスキンの舊宅に隣接せるもので一八五三年の春迄其地に住んだ。一八五二年より五三年にかけては書翰、記録、日誌等其資料に乏しとせられてゐるが「ヴェニス石」に極度の勞

された、第三卷が出版せられたのは同年十月の事である。

註

I know nothing of Ruskin's more admirable and more valuable than this systematic estimate of Giotto's marvellous genius and romantic life, with these brief, vivid, and strictly historic notes on Giotto's composition. One of the best services that Ruskin has rendered to the history of art is the full appreciation of Giotto and his profound reaction on the evolution of Florentine art. Always vehement in his praise, Ruskin has not said a word too much for Giotto. Giotto is one of the few artists towards whom, in his long career as critic for forty years in varying opinions and moods, Ruskin never permits himself to utter a word of disparagement. John Ruskin p. 81

第二卷はヴェニスに於けるビザンティン並びにゴシック建築を研究するものにして其副題は

The Sea-Stories を示せり。一八五一年十月十六日の書翰に於いて之れを説明し

『第二巻は The Sea-Stories と呼ばる可きなり、吾人が陸上に於いてクラウンド、フロアと呼ぶ所ものを私はヴェニス建築について語る時は常に Sea-Story と呼ぶ。かくて第一巻にありし如く第二巻の題名にも同種の二様の意義の附せられたるを知る』。

其順序に於いても本書はヴェニス盛榮の極致にありし時代の建築を研究し、其がアドリアチック海の覇者として勢力を振へる時代を中心として海の入江に沿ふて建てられたる諸宮殿を主材とするものである。之に對して第三巻はルネサンス建築を取扱ひ従てラスキンより見れば當然 The Fall の副題の下に呼ばれる。彼が五三年九月十八日グリーンフインラスより寄せたる書には以賽亞書第三十四章第十一節によつて「空虚をきたらすの石」 Stones of Emptiness の名こそルネサンス建築に凱切なるものであると云つ

た。第三巻には第二巻に於けると均しく本文と關係あり又は獨立の補遺を幾多附加せるが旅行者の便宜の爲めに加へられたるヴェネチアン・インデックスに冠したるノートは本書の梗概そのものとして知られてゐる。

『グリーンフインラス(一八五三年八月二十三日)：昨日原稿を印刷に廻した後、インデックスと共に同書の内容梗概の様なものを附加するは不得策ではあるまいと云ふ考が起つた。蓋し私が是れ迄讀んだ注意をしてくれる評論家達は少くもその全般を解さぬ様に思へる。ビルダア誌の友人は宛かも彼が発見した様に「若しラスキン氏にして正しくば吾々は凡べて誤つてゐるさはどうしたんだ」と云ふ。然らば私が同時に送くる四頁餘の文句を索引説明の個所に附加するは有益の様に考へられる』。

「ヴェニス石」全體として其著者に加へられたる褒讃の辭を茲に引用するは寧ろ繁瑣であらう。壯麗なる文辭雄大なる結構獨創の見解等はラスキン前半生に於ける諸著作に常に冠されたるものであつた。故に茲には二、三の興味ある

評論を除く外は大部分を省略したい。

或者はラスキンを以つて建築論上に於ける唯一最初の深遠なる論者なるが故に又眞に最初のポピュラア・ライターなりとのブラドキンカルの言を爲し(Daily News, August 1. 1853)又或者は第二巻其他に於ける社會論に留意して

『詩人的理解力と、神の畏敬の結實、自然に於ける觀喜と、美術の知識、愛、公正なる判断と、確乎たる事實の把持と異端の否認と歴史の廣さと、現在社會問題に對する勇敢なる挑戦とをその中に凝したる、かゝる綜合は未だその比類ある所を知らざるのである』。

併し最も著者を驚かせ且つ喜ばしめたるものは舊仇である Athenaeum 誌の好感とかゝる方面に於いて態度の崇重を持して下らざるタイムス誌上に於ける最初のラスキン批評とである。タイムス誌は九月二十四日十月一日十一月十二日に第二、第三の兩巻について著者を論じて「ヴェニス石」に著しく特別の敬意を表した。

『私はタイムス誌の批評を大變喜びます、それは本當に同書を讀み、熟考をこらせる人の手になるものです——私のうけた批評中比類をみざる最上の批評です』(十月二日父宛の手紙) マッシュ・アーノルドによつて Ordo contentioque veri と批評せらるるラスキン著作中にあつても「ヴェニス石」は比較的に其目的の統一と組織の秩序とを有せるものである。此書中に於けるダンテ、並びにスペンサー(Spenser)に關する章句は、(第二巻第八章第五十七節以下)ラスキンの文學論として本書の主題より逸脱せるものであり更に「近世畫家論」第二巻の一章「Of Imagination Contemplative」と共に此方面に於ける初期の作品である。更に彼の社會批評も寧ろ傍系で此點は後段に詳しく述ぶ所があらう。かゝる目的の逸走にも拘らず、イー・テイ・クックの言葉によれば讀者は、著者が觸れたる所のもの悉く洞觀の新鮮且つ暗示的光輝を以つて飾られたるを認めて深き印象より免かるゝ

を得ないと云ふ、秩序と連絡との方に於いて缺く所ありとするも彼は常に燦輝たる要領に富んでゐるのである。

既に評論によつて注意せられしが如く「ヴェニス石」は他方面より觀察する時は一つの歴史書である、建築を以つて時代の國民精神生活の記録なりとして其に歴史的文書の意義を附せしめたるはラスキン建築論中の特殊である。故に「ヴェニス石」もかの「七燈」と等しく、或ひは其以上にラスキンの史觀を含んでゐるのである。

然らば建築がその生産者であり又爲に生産せらる可き國民の精神的内容を表現するとせばラスキンはこの歴史的文書より如何なる歴史的事實を觀察し得たるか又其の得る所果して他の史家のよく認容するところであつたらうか。イ・テイ・クックの所言を借りるならば、後世の

してラスキンの所論がヴェニスの歴史的研究に相當の光明を投せりとの結論は聊か妥當なるもの、如くである。

ラスキンの史觀に關しては以上の如く悉く疑問なしとせざれ雖もヴェニス建築に關する彼の所論は實に一個の啓示そのものである。然かも彼の成功が當初に於ける其價値を曖昧ならしめし所以は、其時代に於けるヴェネチアン建築に對する見解と今日に於けるそれとの間に著しき相違が存してゐる爲めである。是等の事情をクックのラスキン傳又は圖書館版緒言より引用すれば次の如くである。「此方面に於いて、彼の著作の成功はその價値を模糊たらしめんとしてゐる。蓋し過去六十年に亘つてヴェニスはラスキンの眼を通じて眺められ來たつた故に彼の見解が個性的且つ獨創的なりし一事は忘れられてゐるのである。彼はタアナアがヴェニスの海、空の

ヴェニスの歴史的研究は大體に於いてラスキン結論の實質的正確を保證したと云ふのである。勿論彼の所論の特色は經濟的史觀にはない。一四八六年ケイブルトの發見を以つてヴェニス衰亡の原因とするが如き政治、商業上の要素はラスキンの輕視する所にして、かゝる特殊の現象に先立つて現存する精神的狀態を論じ其を原因として政治上の變化は寧ろその結果たりと觀察するのである。されば全部に就いてラスキンの理論が他の一般史家による事實の秩序に一致する所なしとするもクックが引用せる Haratio Brown の評によれば、一四一八年 Carlo Zeno の死去せる年代がよしヴェニス衰亡の端を開ける年に非ずとするも、ゴシックよりルネイサンスに推移せる所にはヴェニス市民の精神が其性質、共和國に對する見解、渴仰に於いて著しく變化せるを見出しうると云ふ。故に是等の諸點より

風光に就いての關係に生せしめた所と同じ結果のものをヴェニスの建築に關して生せしめた。今日の總べての畫家のヴェニスは畫筆によるも文字によるも何づれもタアナアのヴェニスであり、恍惚たる色彩に富める都である。然かるに十八世紀に於いては人々の解するヴェニスは Canal-*ogio* のヴェニスでありほの暗らき蔭影に覆はれたる都であつた。今日「建築の七燈」を讀んで Ducal Palace が「あらゆる完全の典型」であるを知つても全然之れに合意し或ひは合意せざる人の有無に拘らず此斷定がパラドックスなりとして吾人を驚かす事はない。又吾人が聖マアクの教會の正面が「麗はしき幻想」であると教へられても吾人は多く之れに黙從せんとする、若しありとせば極めて僅かなる人々が吃驚して憤慨を感ずるに過ぎない。然かるにラスキンが著せる時代には時の建築家はかゝる見解を以つ

て、よし狂氣の證には非らずとするも最も亂暴なる氣まぐれを語るものとして認められた。専門家の意見は St. Mark 並びに Ducal Palace は規則とオーダーにそむけるが故にしかく醜惡にして嫌厭すべきものであるとした。』かゝる見解は當時の知識者の殆ど全部であつた。此の時に於いてラスキンの所説は絶對に新奇なるものである。既に引用せる評論中「ラスキン氏にして正しくばあらゆる建築家過去三百年のあらゆる建築教義は何づれも誤まれるものならざるべからず」との言は正しく此の状態を指すのである。Daily News の評論も同じ効果を語つてゐる。

『彼の建築上の主要なる貢献は「七燈」及び「ヴェニス石」の出現迄は Wren 並びに Evelyn の時代に尖拱式ゴシックすらかく烙印せられたる「野蠻」なる趣味の結果と一般に認められたる。

ラスキン氏が現れて吾人にかく確信せしめたのである。』

ラスキンの建築論は一般的に云へば建築趣味の啓發轉換に與つて力があつた、知識的方面に之れを求むるならば彼の功績はビザンチン派建築の價値を明かならしめ一個のビザンチン復活の運動を惹き、めし外にゴシック復興運動中に於いてヴェネチアン風の趣味の興隆を齎らすに力があつた。セント・マアクの教會建築に関する近代的研究の端緒を開けるも彼の偉大なる先驅に俟つ所多い。就中ヴェネチアン・ゴシックに關する彼の先驅的研究には獨創的のものが多く、ラスキン自から此點を認めてゐる。

余が自から爲せしまでは何人も Ducal Palace の狭間飾を寫生せるものは無かつた。…又英吉利に於ける心ある人の一人も余がその測景正面圖を作りその狭間線形の解剖を爲し是等がゴシックのそれより發達せる事を示すまでは、ヴェニス建築にシステムありとは少しも知る事なかつた。

ロンバアド殊にヴェネチアン建築の上に投せる光明にあり。彼は讀者の頭並びに心にロムバアド建築家は深奥にして柔軟なる感情を有せる藝術家なること、從來彼等に附せられてゐた原理の無視缺除は唯吾人の中にのみ存在せる事實を證明して來た。伊太利の中世建築についての有力なる見解に對して最もよく防禦せられたりと吾人の感せる場合に於いてラスキン氏は吾人に抗爭し最も驚歎し且つ答ふる能はざる程の抗辯を以て吾人の理論的反對を顛覆したのであつた。例へばヴェニスに於けるセント・マアクの建築は古くより、古典派並びにゴシック派の研究者にとつて彼等の知慧を向ける嘲笑の射的場であつた。その形状の惡るき圓天井、大理石を以つて外装したる煉瓦の壁、クラシック、モレスク、ゴシック諸風の錯綜せる混淆はこの起訴に於ける有力なる諸點であつた、然かるにラ

その宗教的偏見に依り既に隆れるゴシック復興運動より加特力教主義の精神を除けるの一事は他方に於いて同運動の普及を妨ぐる宗教的制限を除却せる利益を有した。又ラスキンの所論は常に宗教的色彩に濃厚たるがその眞髓は建築が國民精神並びに生活の反映なりと斷ずるに於いて唯宗教的關係のみならずあらゆる國民的關係をも包含せしむる事となり、ゴシック復興運動を一個のシグナク・アートの運動たらしめたのである。之はラスキンの後年オクスフォード講義中に述べし所にして『ヴェニス石』を通貫して余は是等の麗しき形體はいづれも市民的又は私人的建物に於いて發達し唯その發明の後宏大なる規模に於いて宗教的に利用せられたるものなる事を示さんと試みたのであつた』と。

故に是等の風潮に於いて實際的に建設せられたる新建築が博物館、保險會社、裁判所 Palace of

Justiceであつた事はその著しき例證としてあげらる。ゴシック復興運動の歴史家 C. L. Eastlake が記する所はラスキンの影響が如何に甚大なりしかを語るであらう。即ち建築研究者は何づれも従來の原則、模範を去つて新しき様式に就いたその意匠にはゴシックの要素が採用されヴェニス建築の諸様式は到る處に模倣せられた。更に彼等は實地に花鳥動物の形姿を寫して裝飾彫刻の「ノール・ブル・グロテスク」に現はした、諸種の建築協會に於いて讀む彼等の原稿はその熱に於て充分ラスキンに比敵するものであり又好んでプリ・ラファエライトの青年畫家と相交つて繪畫藝術界に於けると同じき國民建築上の根本的改革を齎す事を誓つた。既に一派を爲せる者と雖も自家の原理の修正を感じ漸次新原理の採取に轉じて行つた。伊太利ゴシックの各様式細部は漸次ロンドンの街頭を飾る事になつたがラス

キンの教義の勢力は「七燈」の光輝の及ぶべき最後の場所と當然想像せらる可き忙しき資本の世にまで到つて其の最高頂に達したと云ふ可きであらう。其は最も豫期すべからざる方面への影響にして意匠、裝飾に於いてヴェニスゴシックの特色を想はする宮殿風建築の出現を見たのであつた。(A History of the Gothic Revival.)

一八五九年より六四年に亘つて建設せられたるウオタアハウス氏の設計に基づくゴシック建築マンチスタアの巡回裁判所法廷、ロゼッティに感動を興へたる Blackfriars のニュー・ブリッジ・ストリート在の Crown Life Insurance Office (一八五五年) 並びにラスキン自身の關係せるオクスフォード・ミュージアム等はかゝる風潮に於いて現はれたる實際的效果であつた。しかし上記イーストレイクの注意に現はるゝが如くラスキンの影響が一つの流行化して卑俗に墮入りた

る恐らく著者にとつて不本意なる結果であつたらう、徒らに外面的事實のみ尙んでゴシック建築に於ける精神的內容の等閑に附せられたるはこの運動に與つて力ありしラスキンの最も遺憾とせる所でなければならぬ。茲に彼の興味ある感想を第三版序文「二つの路」序文「胡麻と百合」等より引用する。

『余の著作中「ヴェニス石」の如く現代美術の上にかく大なる影響を及ぼるものは他にない。併し其影響は僅か此者の三分の一によつてのみ占めらるゝものにして他の三分の二は悉く英歐々民によつて全然無視せられてゐるのである。大抵では醫師が彼の患者が自から藥局に一藥劑中の藥品三種中二種を除く可き命したりと云ふ事よりも寧ろ調藥を悉く窓外に放擲せりと聞く事を欲するが如くに、余の場合に在りても建築家の或者が吾國製造所の煙突を黒赤の煉瓦にて斑色にし銀行や呉服商舖にヴェニス風の狹間飾をして莊嚴にし、又教區教會を低廉なる彩色ガラスや波形瓦の廣告の爲めに陰暗な滑りやすい構造につくりつけたりする所の、其部分的利用を試むべきよりも寧ろ何人も此書に於いて暗示せられたる見解の一つだに採用するの謙遜を爲さざりし一事を開きたいので

ある』。

斯くの如く『その神のあらゆる最上の賜物の汚辱、墮落に自から喜び、毒物の商賣を繁昌せしむる爲めに基督教徒の建築を模倣し、且つ自からヴェスタの神の崇拜にかへて石炭瓦斯の崇拜を哲學的なりと想像する國民によつては如何なる美術に於いても得らるべき成功の最も遠き可能性すら存しない』と。(第三版一八七四年序文) されば其當時彼の周圍に陸續と建設せられたる所謂ゴシック又はロマネスク風の建物は「民衆によつて多少とも是等のスタイルの原理を包含せるものゝ如く想像せらる可きも其實を一つだに之れを體化せるものなく陰影又は斷片だに示し得ざるものにして、單に過ぎし時代の崇高なる建築をボンチ畫化し彼等の精神を殘し去るによりてその形體の名譽を傷つくるに留まるのである』(二つの路、序文)

『併し吾人が其招來に努力せる建築様式は無
思慮なる奢侈、畸形的機制、近代都市の汚穢
なる窮厄等と兩立しうるものでない。當時構
造上の流行の中にあり、殊に英國では宗教界
の感情に援けられて其の様式は實に顯著とな
つた。時としては機關爐又は鐵道の堤の後に
諸君はその瞬時的恩寵の傷ましき不調和を發
見すべく又その花形彫刻の煤煙にまみれて骨
折なくしては判然せざるを見るであらう。余
は余の愛せる様式に對して是等毀損を與へし
に對してのみ責を感じたのである』。(胡麻と
百合、第三講)

ラスキンの建築界に及ぼせる影響中其直接な
るものは誤り間接なるものは正しとせる論者に
對して、デムマアク・ヒルの邸宅を去りブラン
トゥッドへ移る時ラスキンは反問してかく答へ
た。

『余の考ふる所によれば事實は然らざるので
ある。例へばストリート氏にある直接の影響を
與へ來た事は充分望みうる余の誇りである。：
併し余は又此地よりプロムリーに至る間の殆
ど凡べての安別莊建築者に間接の影響を及ぼし
て來た。クリスタル・パレスの沂傍に、ヘルス、或
ひはミラクルズのマドンナの教會より模したる
似而非ヴェニス風の柱頭の下にデン酒や苦酒を
賣らざる居酒屋は一軒も存せざる有様である。、
余の現在の家を離るゝ一つの主要なる了簡は其
が到る處間接に、余自からのつくりたる呪はれた
るフランケンスタインの怪物によりて包圍せら
れたる爲めである』。

さればラスキンは「英國人の道德的觀念より
發展せるヴェニス建築に對して余は責任を負ふ
を拒むものである」と斷じてゐる。されど唯彼
の影響として建築藝術の趣味を啓き其研究を盛

んならしめ建築博物館、建築博覽會の成立を誘
導せし事は普ねく貢獻として認むる所である。

九

「ヴェニス」の石」本來の目的は藝術精神を説く
にある。第三版序文に彼が示せる所によれば、
多くは比較的重要なならざる點のみが重んぜられ
彼の主眼とせる所は無視放擲せられてしまつた
のである。

『第二卷並びに第三卷は如何にヴェニス建築
者の美術の興亡が其國家の道德的非道德的氣
質に依繫するかを示す。之は此本の主目なる
が、其論證の途に於いて他に二つの仕事を爲
す、其は中世に於ける製作者の生活とその製
作との關係並びに如何なる時代にもおける生
活と製作との必然的關係を検討するものであ
る。更にヴェニスゴシックの形成を、初期ロ
マネスク風より其が第十六世紀に於いて所謂

古典的原理の復活に於いて壊滅するに到るま
でを辿つて考察するものである』。

『此書の主題を爲すヴェニス藝術とその道德
的氣質との關係、又同書中に發展せられたる
最重要な實際的原理たる製作者の生活と製作
との關係は近代建築論讀者によつて何づれも
無視せられて來たが又かくなるべきの外はな
かりしものである。彼等は此書の第三の、比
較的重要ならざる部分、基督教的信仰ゴシック
の精神によつて採用せられたるアラビア、並
びにビザンチンの建築の過渡的形式の顯示の
點について利用したのである。……』

故にコーリングウッドは次の如く述べる。『七
燈』と同じく此新書は實際的建築の便覽たるべ
きものには非ずして、此著者に特有なる理論の
敷衍的彰明、即ち社會の藝術に及ぼす反映此場
合に於いては建築の様式と其を建設せる國民の

宗教的調子道德的目的との密接なる關係を更に進んで例證しようとするにあつた。……併し終局には、此研究は極めて多岐の方面に枝葉を分出し爲めに其主幹たる目的は悉く美麗なる措辭の開化、技術的詳細の簇葉の中に隠覆されて遂に最も多數の讀者は是等を以つてその教理の總體又は本質と爲すに至つたのである』と。又フレデリック・ハリソンが『此新著は、「近世畫家論」が繪畫に關する著書ならざるが如くに等しと建築に關する書籍たるべきに非ず』と云へるも同一の意味である。信仰と理想と風俗とが國民の外形的相貌、その美術、その家庭、その公私の建築に與ふる密接なる作用並びに反作用を明かにして、ヴェニス寡頭政治に多分の歴史的類似を有せる英國國民に對して矜持奢侈背信に互る等き道程は遂に同じ壞滅に彼等を導く可しと説く此「ヴェニス石」はそれ自體一個の社

會的教義を闡明せるものと云ふ事が出来る、從つてラスキンのヴェニスに於ける歴史的研究、美術的探鑿、社會的興味が融合して形成せられたる第二卷第六章の一篇を見出す事は寧ろ偶然にはあらざるのである。唯特に深大なる注意興味が第六章「ゴシック建築の性質について」の一節に惹かる、所以は前掲ラスキン自からの所言の如く第二卷中に於いて本來趣旨の論證の傍求められたる實際的原理の存する爲めであり、又その所説が最強く今日に其影響を傳へたからである。されば此點を詳細に示すを以つて本節の目的とするのである。

『近代職工のその機械に對する隷屬に關し、機械的手工の精神的、社會的、藝術的弊害に關し、木質、大理石の習俗的模倣の無味なるに關し、垂直的狹間飾、貶質せる堅筋繪様の單調等に關して彼が教示せる事の大部分は、現代に於ける

吾人の心中にあつては燃えつゝある所である』。(ハリソン)

然かもラスキンが「ヴェニス石」に於いて再三再四機械的反覆の墮落的單調より勞働者が解放せらるゝの大義を辯護せるかの純良なる熱誠は、建築様式の論争に關係せざる方面に於いて遙かに且つ廣き間接的影響を及ぼし來つた。其は明かに八年或ひは十年以後に於いて始められたる社會主義的改造論者としての彼の第二の經歷に序たるものである』。(エフ・ハリソン)

然らばラスキンが説く所は何か。既に「建築の七燈」に於いて彼は生産者が製作中に於ける喜悅が如何に其作品の價値に多大なる影響を有するやを認めた。此點を明かにするには「ヴェニス石」第三卷の結論と第二卷第六章「ゴシックの性質に就いて」の二篇を考察する必要がある。其「結論」は極めて明確にラスキンの所感

を表明せるもの、一般藝術の尊貴たる可き條件を論じ建築藝術に言及しては現代に推稱せらる可き建築様式、其を具體化せしむる精神的内容を求めて、希臘羅馬並にルネサンスの諸形式を貶けてゴシック建築の價値を高陞せるが故に、其の論ずる所、ゴシック建築の精神を解剖せる第二卷第六章の所説に最も深き連絡を有するのである。前述の如くラスキンの本旨とする所藝術殊に建築の精神的内容を説くものなれども彼が第二卷第六章に於いて取扱へる製作者工匠勞働者の生活とその製作とに關する傍系的所説と稱せらる部分は斯くして本書に於けるラスキンの主題と離す可からざる關係を保つたのである。結論は當時の實際的狀態に招致す可き新傾向を指示するに終るものなるが、其處に論せる彼の藝術觀に就いては著しく宗教的色彩の濃厚なるものあり、之れラスキンの美術論中一の特

長とせらるゝもの、又ラスキンの屢、爲めに非難せられたる所である。

フレデリック・ハリソンの説く所、ラスキンの宗教的藝術觀に反對の證左をあげ、彼の觀察結論の偏倚を指摘する。此の論争に就いては筆者自かの斷案を下すを得ずと雖も、後段「近世畫家論」の續卷を記する所に於いてラスキンの所説を稍か詳述するであらう。

「ヴェニス」の石」第二卷第六章は百十四節より成る、其目的は普通稱せらるるゴシック又はゴシック風 (Gothic or Gothiness) の特質を闡明して其が蒙れる不當なる非難毀貶より解放せしめんとするにある。其内殊に彼の社會的教義を表明せるものとして尊重せらるゝは第九節より第二十一節に至る十三節である。ゴシック建築の性質は其精神的方面と形體的方面とに分つ事を得る。形體的方面の特質としては屢、論せ

らる、尖拱ラスキンに従へば roof-proper として尖拱 roof-mass として切妻屋根 (就中後者はゴシック本來の特質) —— (第二卷第六章第七十九節以下参照) —— 葉形飾 (或ひは瓣飾 Foliate) 等を擧げるも (ゴシック建築の外形的定義は第九十八節参照) 之れのみを以つてしては著者の満足し能はざる所にして、ラスキンはその精神的内容を是等形體的特色と不可分の關係に於いて認め以つてゴシック建築の特質となすのである。(第二節、第四節参照) 然らば既に吾人は著書が「ゴシック建築の性質について」の一章に於いて寧ろ精神的內容の解剖に詳密なる可きを想像しうる。即ち全章百十四節中、著者がゴシック建築の相貌より看取するを得たる (註一) 精神的能力又は表現を六種に分ちて論ずる諸節は (第六節参照) 第六節より第七十八節に及び、全頁數の約三分の二を占むるのである

(註二)。されば第二卷第六章は比較的建築上の技術的詳細に乏しく従つて社會的教義を窺ふ上に於ては又ラスキンの藝術論を知る上に於いては第三卷結論の一章と共に何人も味讀すべき一章である。此一章が後に分割單行本として刊行せらるゝに至りたる理由の一つ又こゝに存するであらう。

註一 建築は書籍の如しと云ふ點に就いては同章第四、二十八、四十、百十四の各節、第二卷第四章等を参照
註二 ラスキンの全集圖書館版によると同章は一八〇—二六九頁、約九十頁、エツェリマンヌ・ライプラー版によると一三八—二二二頁七五頁中精神的要素を論ずる頁は前者一八四—二四五頁即約六十頁後者一四一—一九〇頁即約五〇頁に互り丁度全體の三分の二を示す。

ゴシックの精神的内容、其建築的表現と建築者の性情は左の六種である。1. Savagness, or Rudeness, 2. Changefulness, or Love of Change, 3. Naturalism, or Love of Nature, 4. Grotesqueness, or Disturbed Imagination, 5. Rigidity or

Obstinacy, 6. Redundance, or Generosity.

第一の粗野に關してラスキンは風土の人心に及ぼす影響を重要視する、歐洲大陸の南と北とに互つてその自然的環境が人心に及ぼす相違を敘述せる點は最も興味ある觀察である。(詳しくは「ヴェニス」の石」第二卷第五章第七第八七五節「近世畫家論」第五卷第六編第九章第十節以下、第七編第四章第二節参照)。さればゴシック建築のこの特質は北部歐洲人の自然に對する剛健なる生活々動を指示するものなるがラスキンは更にその宗教的原理の表現を其處に見る。是れ即ちラスキンが建築裝飾の三様式を論じゴシック精神に含まるゝ基督教的信仰は魂の自由と不完全の承認の上に堂々然かも謙讓に示さるゝなりと説く所である。(第九、一〇兩節) 近代的精神は徒に完成を憚らして完全、正確は屢其の尤なるものを機械的作用の中

に認める。完全正確を期するが故に製作の標準を低下したのはアッシリア、エジプト派の建築裝飾であり、容易に正確を達しう可き形體的整調を與へたるは希臘のそれであつた。共に二者は隷屬的裝飾であり、工匠製作者は正確の爲めの機械であり、自由思想像力(製作者としての)を許されざる隷屬的システムの中にあつた。(第九節)かくしてラスキンは完全なる事を企圖乃至具有するものよりも不完全なる外形を有するものに精神的價值の大なるを認めんとする(第十一節)。單に表面的正確を期するは機械であり道具であり又尺度を秤衡との仕事に過ぎず、かゝる製作に従事せる人々は要するに「生ける道具」に過ぎない。製作、創造の精神又は目的はかゝる正確外形の完全以外に存する(同上)而して人は同時に創造的人格たり道具機械たるを得ない(第十二節)手、眼の正確を強

of her fields, than there is while the animation of her multitudes is sent like fuel to feed the factory smoke, and the strength of them is given daily to be wasted into the fineness of a web, or racked into the exactness of a line. And on the other hand, go forth again to gaze upon the old Cathedral front, where you have smiled so often at the fantastic ignorance of the old sculptors: examine once more those ugly goblins, and formless monsters, and stern statues, anatomical and rigid; but do not mock at them, for they are signs of the life and liberty of every workman who struck the stone; a freedom of thought, no charities can secure; but which it must be the first aim of all Europe at this day to regain for her children. かくてラスキンは社會觀を開陳して云ふ

『誠に、其は到る處に諸國民の大衆を馳つて他の害悪よりも著しく、彼等自から己にその性

要せらる時人の魂は碎磨せらるゝ、魂の自由なる跳躍を許す時は前者の正確は幾分損せらるゝ。尊重すべきは眞を寫すべき自由なる創造的精神の活躍にして表面的皮相的正確の追及ではない。かくてラスキンは第十二節に於いて無意味低級なる仕上げと正確とを拒みて魂の自由を高唱する。人の製作と神の創造との區別は明かに此關係にある、神の創造は完全であり、之れに對して人はその創造的意思を窺ふを許されぬ、人の製作は製作物そのものよりも製作に示されたる製作者の慧智にその價值がある(第一卷第二章第四節參照)さらばラスキンの尙ぶ所は精神の自由である。

There might be more freedom in England, though her feudal lord's slightest words were worth men's lives, and though the blood of the vexed husband man dropped in th furrows

情を説明するを得ざる自由の爲めに、無益、矛盾にみち破壊的なる争闘に導きつゝあるは、労働者の機械化する這般の墮落である。富、貴族に對する普遍的なる彼等の叫喊は饑餓の壓迫により或ひは侮蔑的矜持の苦痛によりて彼等より止むを得ず出づるものではない。是等の苦痛壓迫は大いに其原因たり又あらゆる時代に於いて禍する所大であつた。併かし社會の基礎はしかも今日に於けるが如く振蕩せらる事なかつた。其は人々が乏しき生活をするが爲ではなく、彼等が自からの糧を得るの仕事に於いて享樂を有する事なく従つて富を以つて快樂の唯一の手段として之れを狙ふ爲めである。人々は上流階級の侮辱によつて苦しめらるゝのではなく彼等自からの侮辱に耐へ得るのである。蓋し、彼等は己れに宣告せられたる勞働の性質は正しく己を墮すべきもの、彼等をして人間以下たらしむ

るものなるを感ずるが爲めである。』上下の隔離の今日程甚しく又今日程相反目せるはない。其の離反の原因は古に於ける貴族と貧民の隔離が僅かに法律による障壁に基くものに過ぎざりしに今日にありては正しく社會的地位の相違であり人類の地上に於ける高地低地の懸壁でありその低部に於いてみなざる毒惡なる空氣の存在にある。かくしてラスキンは更に自由と義務と恭順とを説く、正しき自由の意義を理解し他人に遵ひ、彼並びに彼の地位に尊敬を致す事の奴隸的ならざるを覺るべきであると。

『此れに往けど曰へばゆき彼れに來れと曰へば來る』かく云ふ者は、最も多くの場合彼に順ふ者よりも遙かに抑制困難の所感あるなり、此兩者のうち一人の行動は彼の肩上の重荷によつて妨げられ、他の者の行動はその口唇にある馬銜によつて妨げらる。然かもその重荷の輕る

くせらるべき方法なく又吾人が馬銜を邪魔にして齧るに非ざれば何等馬銜によつて煩はざる、所なし他に尊敬を致し己れ並びに生命を彼の配下に置くは隷屬に非ず、そは屢、人間の此世に於ける生活中最も尊貴なる状態である』(第十五節)

然かるが故にラスキンは分業、分勞と稱せらる、現在の生産状態、勞働状態を排する、其は正しく云へば勞働の分割に非ずして、人間の分割である。故にかゝる生産組織を有せる近代の製造所に於いては、その製作能力は百般多岐に互つて可能なるもたゞ一つ人間を造くるを得ざるのである。

吾人は棉花を晒白し、鋼鐵を鍛へ、砂糖を精製し、陶器を作る、然かれども、一個の生きたる精神を輝かし、鍛へ、精鍊し或ひはそを作る事は遂に吾人の利益計算に加へられざるのである。』然らば其を救ふ道は如何、其は教ふるに非らず、説くにあらずたゞ如何なる種類の勞働が人間にとりて良く、又彼等を向上し且つ幸福ならしむるものなりやを、あらゆる階級に於けるものが正しく理解する事にあり、勞働者の墮落によつてのみ得らるゝが如き便宜、美、又は廉價を決定的に犠牲とする事にあり、而して健全にして氣品高からしむる勞働の生産物並びに結果に對して等しく決定的なる需要を發すべき事にある。其は消費者の徳性を前提とする生産の規律を意味する。絶對的必要ならざる貨物にして、其の生産にインヴェンションの参加せざるもの、生産は之れを奨勵せざる事はその一、

決して正確なる仕上げを他に實際的又は尊き目的なくして仕上げ自身の爲めに要求せざる事はその二、大作の記録を保存する目的以外に、は如何なる種類の模倣又は模寫を爲さしめざる事は第三の律則である。かゝる律則は當然パトロン、消費者の責任に屬する、ラスキンは富める者をして最も重大なる意義あり力あるものなりとせるはかゝる關係より發する。玻璃玉を造る者、寶石類を琢磨する者は、その勞作中に何等心情の能力を發揮せしむるを得ず、又人間の能力を示すを得ず、されば玻璃玉寶石を購ひ帶する者はその數丈の勞働者を奴隸的状态に置くものである。富を有する者は其富を社會的に利用し、數名の勞働者を雇用し彼等の生活を保護せしむるを以つてその責任を果したりと云ふを得ない。富者は常にその富を利用するにあつて勞働者の心身を向上せしむるの責任を有する

のである。(此點は聊か詳しく「ジョン・ラスキンの奢侈論」中に説いた所である。本誌第十六卷第五、六兩號)

生産の律則の第二、第三については茲に論ずるの必要は少ない。唯第二の仕上げ、表現の問題に關しては再び製作者をして人間的ならしむるか機械的ならしむるやの問題を生ずる、少くとも此の章節に於けるラスキンは、「唯、思想を求めよ彼がよき方法を語り得ざるを以つて、又汝が彼にその文法を教へ終る以前には農夫をして無言たれとなす勿れ」と云ふのである。然かし更に新しき問題は、製作に於ける思想と労働との分離である。換言すれば所謂藝術家又は美術家と工匠職人との分離である。既に「建築の七燈」に於いてラスキンは現在の情態の下にありては一般工匠、職人に製作を愛する感情をその仕事に現はしう可きものなきを認めて、若し

たまくありとすれば彼は自から工匠の地位を脱してアカデミシアンに爲らんとするの傾向あるを述べてゐる(七燈五章第二十四節)かくて美術家は意匠設計を凝へ、その實際的製作は正確を目的として一般労働者に委ぬる状態である。こはラスキンの稱して奴隸的状态の云ふものであるが、かゝる考は思想と労働とを分離しうる、即一人の思想は他人の手によつて遂行せられうべく、否遂行せらる可きものなりとの、又肉體的労働はそが知によりて支配せらるゝ時は墮落なりとの誤れる推定の上に立つものである。大規模なるか又數學的に決定しう可き仕事を除いて、他に一人の思想を他人によつて表現しうべきものはない、創意せる者と指令に従ふ者とのタッチの精神に於ける差別は一般に藝術上の偉大なる作品と平凡なる製作との相違である。又知に支配せられたる肉體的労働の低下

は、普通製作に於ける思想と労働との分離に基く、今日吾人は常に二つを區別せんとつとめ、一人の常に思考せる人を欲し、他の、常に労働せる人を欲す、一人を紳士と稱し他を労働者と呼ぶ、然かるに労働者は屢、思考すべきであり、思想家も屢労働す可きである、而して共に最上の意味に於ける紳士たるべきである。兩者共に不可分の關係に立つ、思想は労働によつてのみ健全たるべく、労働は又思想によつてのみ幸福たりうるのである。茲に吾々は屢、引用せらる、後年の「勤勉なき生活は罪惡なり美術なき勤勉は粗暴なり」との名句に現はれたる思想を見出しうる。(レクチュア・オン・アート第三講第九五節)

『若し吾人の總べてが或る種の良き工匠でありしならば其はよき事であらう、又肉體的労働の不名譽は悉く一掃せらるゝであらう、故に貴

族と平民との間にはなほ人類の峻嚴なる差別あるべしとするも後者の間に怠惰と勤勉と又自由職業と非自由職業との間に於けるが如く職業上に峻嚴なる差別は存すべきでない。あらゆる職業は自由であるべく、矜持は職業の特別なるによる事少く、業績の優秀なるに大なるべきである、更になほ、各種の職業に於いて主師はその最も苦しき仕事を爲すべくあまりに尊大たるべきではない。畫家は自己の用ふる繪具を描るべく、建築家はその部下と共に石工の作事場に於いて働くべく、工場親方は自から彼の工場に於ける何人よりもより熟練なる労働者たるべく、一人と他の者との差別は唯、經驗、技術に又是等のものが當然又公正に獲得すべき權威と富とについてのみ存すべきである』(第二十一節)

美術家が工匠であり工匠は美術家たれと云ふ

はラスキンの最も強く主張する所である。數年の後「二つの路」に含まれたる講演に於いて建築家は彫刻家たるべしと云ひ(第一二三節)勞働者大學に關係しては美術家、藝術家の養成よりは寧ろ職工、工匠そのまゝの地位に於いて彼等を幸福向上せしめんとする努力等は皆此の思想の表現である。イー・ティール・クックが引用せる、友人 Count Zorn に宛てたる書翰に彼のヴェニス建築史の研究は美は製作者の幸福と想像とにより建築家は彼自からその部下の先頭に立つて、肉體的勞働の技術の首領として働く事騎士が軍隊の隊長たるが如くたるに非ずんば自からマヂスタアとしての權威を要求しうるものに非らざる事を示すにあつたと、云へる二十年後の回想は正しく如上の點を語つてゐるものである。

特に社會的教義として注意せらる可き諸節は

來し建築と共に當該社會滅亡に到るを説くが故に、彼の社會思想研究上に等閑に附す可きに非ざる所以を述べたのである。

附記「ヴェニス」の石」を三回に互つて紹介せる所以は上記結句によつて明かであらう。然かも本稿はなほ不充足なるを免れない、語るべきは多い、第二卷第六章が勞働者大學趣旨書となりし頗末、ウキリアム・モリスの序文等はそのである。又更に重要なるは是等建築論がラスキンの大著近世畫家論の體系に對して如何なる關係に立つたかである、こはグックがラスキン傳第一卷二九九頁以下に論ぜる所であるが「近世畫家論」第三卷所説と思想的連絡寧ろ類似の斷定結論等が見出さるゝ事は當然である、この事を興味ある問題であるが紙數の増加を恐れて省略した。是等の點が最も不十分な點であるが就中「ヴェニス」の石」全卷に互つて通讀するの猶豫なかりしは最も不満とする所である、唯幸ひに其は余が以上ラスキンの精神を傳ふるに於いて多大の妨げとなりしものに非ざるが如し。他日多少補筆しうれば幸甚である(一三・四・二四)

以上を以つて終るのである。第二十二節の冒頭には「若し余が此の興味ある問題を追及せんとするならば手元に於ける問題より遠ざかる事遙かなるに至るであらう」としてゐる。併かし既に述べたるが如く「ヴェニス」の石」全卷が一つの社會的意義を有するが故にラスキンの社會觀として注意すべきものが茲に終れりと爲すを得ない。試みに以下の各節を見れば不完全性の意義を論じてゴシクの特質の第一を終へ更に第二の變化を論じて規則を峻拒し、變化の中に作者の力を認め、第三の自然主義ナチュラルリズムに入つては彼獨特の藝術論を開陳してゐる。是等の諸點は聽て別の機會に於いて紹介するを得るであらう。唯こゝにはかくしてラスキンの建築藝術論はその組織の健全なる、その活動の幸福なる、その構成の自由なる社會を前提とし、形式主義に墮して滅亡に向ふ藝術は共に社會組織に缺陷を

勢州松坂に於ける銀札の沿革 (下)

三井 高陽

銀札五ヶ國融通併に引換への方法につき、南紀徳川史によれば

右銀錢札五ヶ國通用ヲ講セシ時ノ情況ハ、初メ大阪ニテ有名ナル兩替商三井、鴻池、加島屋、天王寺屋、辰巳屋、百足屋、米平(殿村)其他三名合セテ十人、尙ホ有力ニシテ取引多キ豪商ニ説キ流通ノ事ヲ記シ各自ノ引受高ヲ定メシメタリ、而シテ銀札方役所ヲ大阪ハ高麗橋、堺ハ甲斐ノ町、兵庫ハ北仲町、奈良及ビ越部等ニ設置シ各所へ若山ヨリ役人出張、銀札ノ用紙ハ松坂ヨリ輸送シ該役所ニテ印刷、以テ引受商人へ約束額ノ銀札ヲ渡シ支出之上ハ正